カナダ英語の綴り字

三宅　亨

はじめに

本稿は現代カナダ英語における綴り字（spelling）の実態について考察する。拙稿（1990）[1]でも少し触れたが，カナダ英語にはアメリカ風の綴りとイギリス風の綴りが共存している。例えば，街の看板や掲示には“CENTRE”とか“THEATRE”といったイギリス風の綴りが用いられているのに，多くのカナダ人は日常生活では“center”や“theater”と書く。レストランの並ぶ通りを歩いたり，職業別電話帳を繰ってみると，“licensed premise”と“licenced premise”が隣り合っているのに気が付く。また，看板のなかには“TIRE CENTRE”のように一つの語句の中に英米両方の綴りが用いられるというカナダ独特の表示例もある。そこで次のような笑い話も生まれてくる［McConnell, 1979 : 41］。

Canadian Teacher: Spell “color.”

Canadian Pupil: Which way－British or American?

カナダ英語の綴りの特徴についての考察を進めるうえで参考になる調査としては，Scargill（1974）や Ireland（1979）がある。筆者はこれらの調査結果を参考にして，ブリティッシュ・コロンビア州のバンクーバー地域（The Greater Vancouver Area）で簡単なアンケート調査を実施するとともに，カナダの出版物（新聞・雑誌・書籍など）を資料として，カナダ英語にみられる綴り字を調べてみた。

1．調査方法

参考資料として用いた Scargill（1974）の調査（The Survey of Canadian English）はカナダ全10州の第9学年（Grade 9）の生徒と彼らの両親，計14,228名（有効回答者数）の使用する英語を分析・検討したものである。また，Ireland（1979）は2准州を含む全国の中等学校（secondary school）の生徒3,235名を対象に実施した調査（The Survey of Canadian Spelling）の結果をまとめたものである。

筆者自身は1988年秋から1989年春にかけてバンクーバー市およびその近郊の住民47名（男22名・女25名）を対象にした語法調査を実施したが，回答者の年齢・職業などは多様性に富んでいる。バンクーバー市内では住民の四分の一がブリティッシュ・コロンビア州以外の州または隣接するアメリカを含む外国の出身者であるといわれている。したがって，調査対象者のすべてがブリティッシュ・コロンビア州生まれとは限らない。[2] また年齢的には，第一言語修得時期を一応終了したと判断される16歳以上に限定したが，回答者は30代がもっとも多く，年長者は60代なかばである。[3] 職業・社会的地位では，学生，教師，会社員，公務員，企業経営者，自営業，主婦，年金生活者等に及び，彼らの学歴も様々である。

活字出版物としては，現代（1970年以降）の文学作品や通俗小説，専門書などに加えて，カナダ唯一のニュース週刊誌 *Maclean's* や唯一の全国日刊紙 *The Globe and Mail* およびバンクーバーの地元日刊紙 *The Vancouver Sun*, *The Province* などを資料として活用した。

2．調査結果

1．-re（英）　-er（米）

はじめにあげた centre や theatre の例にみられるように，語尾の -re はイギリスで，-er はアメリカで一般的な綴りである。現代カナダ英語に関して信頼できる辞書といわれる *Gage Canadian Dictionary*（1983年，以下

GCD と呼ぶ)[4] は，center を空見出しとして，イギリス風の綴り centre の項で語義解説を与えている。

しかし，筆者の調査では次のようにアメリカ綴りの center を使用する人のほうが多いという結果が得られた。

centre	center	either	
19.1	34.0	46.8	(数字は%)

この語については，上記 Scargill や Ireland の調査でも -er 型が優勢であるという筆者と同じ結果が得られている。ただし，theatre という語に限っては，どの州でも -re の使用者が -er 使用者や両綴り併用者（either）の数を上回っている（58 : 21 : 21）と Ireland は報告している。

新聞や雑誌ではイギリス風の綴りが一般的である。

(1) Late in the fall of 1986, the *centre* got its first Canada-bound refugee, a Central American.

— *The Globe and Mail*, January 11, 1989

(2) But at the same time, barely nine years after its inauguration, the promise of the Gold Coast has lost some of its *lustre*.

— *Maclean's*, May 29, 1989

またカナダ文化の独自性や伝統を守ろうとする作家や出版者，あるいは学術書などにも -re 型が好まれている。

(3) Japeth's fury was *centred* on the fact that no one had put down water for his beasts.

— T. Findley, *Not Wanted On The Voyage*

(4) Long hours yielded families but a penny or two a day, scarcely enough for a *meagre* diet of meal, buttermilk, and potatoes.

— C. Brown (ed.), *The Illustrated History of Canada*

しかしながら，大衆向けの通俗小説や個人レベルでの書き物（手紙やメモ）では -er 型がしばしば用いられる。

(5) "He teaches art at the high school. They've got a couple of his

paintings hanging in the new Bank of Montreal, over near the shopping *center*."　　— L. R. Wright, *Sleep While I Sing*

なお，語尾の -re と -er の併用例は，上例中の語の他に fibre, kilometre, metre, spectre などの語にもみられる。

2．-our（英）　-or（米）

colo(u)r の対立，すなわち -our と -or について，*GCD* は，glamour という語，および肩書として用いる Honourable やイエス・キリストを指す場合の Saviour という語を除いては，カナダの印刷物（printed materials）の中ではアメリカ風の -or のほうが一般的であると述べている。

確かに，新聞や雑誌などのマスコミは -or を好む傾向がある。

(1) Rural residents have until Nov. 2 to get on the [voters'] list but can still vote on election day if a *neighbor* or someone else can vouch for them.　　— *The Vancouver Sun*, October 21, 1988

(2) The Federal Court of Appeal has freed Canada's two major railways from a costly set of conditions imposed by a *labor* arbitrator as the price of eliminating cabooses from trains.

— *The Globe and Mail*, March 23, 1989

1867年（カナダ自治領結成）以降の新聞を対象にした，ある調査によれば，カナダの新聞は -or を使用してきたという [Ireland, 1979 : 79]。

しかしながら，学術専門書や文学作品などでは -our が圧倒的に好まれている。また，公文書でも -our の使用が奨励されている。

(3) She is wearing my *favourite* flowery cotton print.

— S. Swan, *Sluts*

(4) The lavender *colour* poured through the window onto her bedspread.　　— E. Hekkanen, *The Violent Lavender Beast*

また，Ireland の報告（次表の SCS）や筆者の調査（同 TM）でも -our の使用者のほうが多いことが認められる。

	colour	color	either
SCS	62	37	
TM	57.4	17.0	25.5

Scargill の調査は，中学生（Grade 9）の方が -our 型を多く用いる傾向があり，また男女とも3割以上の生徒が両方を使用するのに対し，彼らの父親の場合は -or 型使用者のほうがやや優勢であることを示している。

この種の語としては，arbour，behaviour，favour，harbour，honour，humour，odour，parlour，rigour，rumour，vigour などに英米両綴りの併用がみられる。

3．-ce（英） -se（米）

名詞 defence は *OED* によれば13世紀後半からイギリスで用いられた綴りであり，現在アメリカで一般に用いられる defense は Noah Webster の奨励に起因する。*GCD* は defense を空見出しとし，-ce の項で解説している。

Scargill の調査ではカナダ全州において圧倒的にイギリス風の -ce の使用者が多いが，「生徒の間ではアメリカ風の綴りが増えつつある」と指摘している。この調査の数年後に実施された SCS の結果では，後で述べる一つの例外（practice／practise）を除き，このグループに属する語はすべて -ce 使用者と -se 使用者の比率がほとんど同じになっている。

筆者が調査に選んだ名詞 defence に関する回答は次のとおりで，-ce の使用者数がわずかに優勢であった。

	defence	defense	either
TM	40.4	34.0	25.5

出版物でも -ce の綴りのほうが一般的である。

(1) Although Japanese *defence* spending is far below that of its Western allies as a percentage of GNP, in absolute terms Japan is the world's third biggest military spender behind the United

States and the Soviet Union.

— *The Globe and Mail*, January 31, 1989

(2) And meanwhile, if the NDP wasn't scoring too many points on *offence*, it wasn't having to stop too many shots on *defence* either.

— Caplan *et al.*, *Election*

では，licence や practice のような名詞にも動詞にも用いられる語の場合は，どうであろうか。*GCD* では，これらの語に対して，名詞では -ce を、動詞には -se の綴りを勧めている。

SCS では licence に関して次のような結果が得られている。

	licence	license	either
名詞	45	45	10
動詞	49	41	10

次例のように，*GCD* の勧めにそって品詞によって -ce（名詞）と -se（動詞）を使い分ける新聞社や出版社もある。

(3) Surrey's director of permits and *licences*, Dave Magnusson, said the city revoked the *licence* because it dose not allow for a small theatre —peep show —on the premises. The store is *licensed* for sale and rental of video.

— *The Vancouver Sun*, December 14, 1988

上で SCS の唯一の例外とされた practice／practise については，次のような調査結果が得られている。

	practice	practise	either
名詞	82	10	8
動詞	65	24	11

すなわち，名詞と動詞のいずれの場合も -ce が優勢であり，アメリカ綴りが好まれている。

The Vancouver Sun や *Maclean's* は品詞により -ce（名詞）と -se（動詞）を使い分けている。

(4) The EPA's new policy of exposing polluters contrasted sharply with *practices* in Canada, where federal officials have been reluctant to identify polluters in the past — and have no firm plans to do so in the future. — *Maclean's*, August 28, 1989

(5) The bullpen sagged, too, in the second half, partly because the highly effective Parrett required six stitches in his index finger when a ball hit it as he *practised* bunting in the batting cage.

— *Maclean's*, October 17, 1988

4．-ll-（英） -l-（米）

活用語尾や派生語を形成する際に語尾の子音をかさねるのは一般的にイギリス風の綴りである。*GCD* では -ll- 型を優先した見出しになっている。

動詞 travel の過去（分詞）形に関する SCS および筆者の調査結果も -ll- 使用者が多いことを示している。

	travelled	traveled	either
SCS	77	19	4
TM	74.5	10.6	14.9

また Scargill の全国調査でも，男子生徒の67%，女子生徒の74%，父親の69%，母親の73%が -ll- を使用すると回答している。

travelled およびこの類に属す語の用例を以下にあげてみる。

(1) He could not have money unless he *travelled* down the trail with Dr. Au. — W. Deverell, *Needle*

(2) Rekart said the figure shows the rate of new cases of acquired immune deficiency syndrome hasn't *levelled* off.

— *The Vancouver Sun*, February 17, 1989

(3) Quebec's decision aroused strong opposition and *fuelled* criticism of the British government's policy of allowing British companies to profit by importing toxic wastes for disposal.

— *Maclean's*, August 21, 1989

(4) *Modelled* on the Mother of Parliaments in Westminster, the buildings are set in large grounds where every spring tens of thousands of multi-coloured tulips — an annual gift from Holland — burst from the exquisitely trimmed lawns.

— L. Heaps, *The Quebec Plot*

これらの語は -ing 形になる時も子音字をかさねる。

(5) Mr. Mulroney began *pencilling* in more emphasis on healing in the text of his speech the moment it was clear his government had been returned with a majority.

— *The Globe and Mail*, November 22, 1988

(6) Crawford was on the way to Toronto's Pearson International airport on July 5, 1984, to fly to Tokyo for her first international *modelling* assignment when the car in which she was riding was rearended in the dense fog.

— *The Vancouver Sun*, March 10, 1989

なお，この類に属する語には上にあげた語以外に cancel, gravel, kidnap, label, level, quarrel, shovel, signal, worship なども含まれる。また，-er を付けて agent noun を作る場合も子音字をかさねることがある。

	traveller	traveler	either
TM	85.1	10.6	4.3

(7) Ms. Martin also urged air *travellers* to use public transportation to ease the traffic and parking problems at Pearson.

— *The Globe and Mail*, December 10, 1988

次に，skil(l)ful の場合を調べてみると，SCS でも筆者の調査でも圧倒的に -ll- の綴りが優勢であった。

	skillful	skilful	either	無回答
SCS[5]	67	9		

TM	89.4	4.3	4.3	2.1

単子音綴りの例をあげておく。

(8) Ever since Confederation, Quebec has been the most *skilful* province in knowing how to play the politics of self-interest as opposed to the West, which tends to vote on the basis of emotions. — P. Newman, *Sometimes A Great Nation*

また enrol(l) という語に関しても，子音をかさねる綴りの使用者が圧倒的に多かった。

	enroll	enrol	either	無回答
TM	80.9	8.5	8.5	2.1

次の用例(9)では二重子音綴りが，(10)では単子音綴りが使用されているが，いずれもバンクーバーの地元日刊紙からの例。

(9) Anthony Chan, 36, came to San Francisco when he was 15 years old to *enroll* in high school.

— *The Vancouver Sun*, March 16, 1989

(10) College officials predict more than 1,000 students a year would *enrol* for senior-level courses at the three colleges.

— *The Province*, September 30, 1988

なお，*GCD* では skilful や enrol の単子音綴りを優先している。

以上の調査結果と用例をみるように，カナダ英語では -ll- の綴りが広く用いられているが，Ireland は jewelry (57%)，marvelous (63%) woolen (70%) については単子音字 -l- のほうが好まれていると報告している。

5．-se（英） -ze（米）

動詞の語尾 -se と -ze との間での選択では，*GCD* [*s.v.* -IZE] が次のような語法解説を与えている。

In Canadian usage -ize is preferred for words containing the Greek suffix, such as *apologize, civilize, visualize*. But -ise is

usual in differently formed words derived from Old French, such as *advertise, exercise, supervise.* The spelling -ize is used in forming new words, such as *customize, slenderize.*

analyse／analyze について調べてみると，一般には -ze のほうが優勢である。

	analyse	analyze	either
SCS	25	61	14
TM	23.5	53.2	21.3

さらに Ireland の調査では，criticize は72%，recognize は89%と圧倒的に -ze 型の綴り使用者が多いことが明らかにされている。同類の語としては organise, paralyse, realise などがある。

Maclean's は recognize を使用しているが，analyse（次例）や paralyse ではイギリス風を用いている。これは *GCD* の勧めるパターンと一致する。

(1) *Analysed* properly, the polls might be more useful generally.

— *Maclean's*, November 28, 1988

学術専門書の執筆者や作家の間では -se を好んで使用するものが少なくない。

(2) I was old enough and travelled enough to *realise* that a purely mechanistic approach to problems of cultures and traditions was immature and prone to miscalculations.

— G. Ryga, *The Village of Melons*

6．-ae／oe（英）　-e（米）

GCD は encyclopedia の項では単母音綴りを採用しており，1989年に改定版が出た百科事典のタイトルも *The Canadian Encyclopedia* である。Ireland や筆者の調査結果からも，単母音綴りが広く用いられていることがわかる。

	encyclopaedia	encyclopedia	either
SCS	3	87	10
TM	19.1	74.5	6.4

SCS では，maneuver が51%（manoeuver 29%），medieval が80%（mediaeval 11%）の生徒に用いられているとの調査結果が得られている。*GCD* でもこの3語は単母音綴りが優先見出しになっている。

ここでも，専門家や作家の間ではイギリス風の綴りに固執する人が少なくない。

(1) At one point, the doctor came and asked Bragg's permission to administer an *anaesthetic*. — T. Findley, *Bragg & Minna*

(2) In Vancouver we had been looking for a mature metropolis with a honed, urban *aesthetic* and ringed by outlying picturebook Canadiana. — R. Woodall, *A Great Town to Splash In*

7．黙音（silent）e ＋ 接尾辞（suffix）

judg(e)ment のように黙音の e に接尾辞が付く場合，この e は表記されないことがある。このような語に関する調査結果は以下の通りである。

	judgement	judgment
SCS	78	15

	acknowledgement	acknowledgment	either	無回答
TM	59.6	34.0	4.3	2.1

	moveable	movable
SCS	56	37

	liveable	livable	either	無回答
TM	68.1	23.4	4.3	4.3

この数字だけから判断すると，カナダ英語では e を省略しない綴りのほうが好まれているようである。

しかし，新聞や雑誌では e のない形のほうが一般に用いられている。

(1) And what will happen to Vancouver's *livability* when it all goes? — *The Globe and Mail*, February 23, 1989

(2) And if in the future I lose an election on it, I will accept the *judgment* of the people. — *Maclean's*, March 20, 1989

ちなみに *GCD* でも，judgment，acknowledgment，movable，livable のように e を省略した綴りが優先見出しとなっている。

8．その他

ここでは上に分類した規則性にあてはまらない個々の語についての綴りを取り上げてみることにする。

まず，「灰色」を表す語の綴りは，一般にイギリスでは grey が，アメリカでは gray である。この語についてのカナダ人の好みはイギリス風の grey である。

	grey	gray	either
SCS	67	33	
TM	51.1	17.0	25.5

Scargill の調査結果でも同様の傾向がみられる。次は週刊誌からの例。

(1) The third day dawned *grey* and rainy — and brought new troubles for Clark. — *Maclean's*, February 20, 1989

次に「パジャマ」の綴りでもイギリス風が好まれる。

	pyjamas	pajamas	either
SCS	61	31	7
TM	51.5	34.0	14.9

(2) "I guess you left your *pyjamas* in your overnight case," he said. — W. Deverell, *High Crimes*

建物の「階（数）」を表す場合もイギリス風の storey のほうがよく用いられている。

	storey	story	either	無回答
TM	51.5	36.2	10.6	2.1

(3) I sit at the window, drinking my coffee, biting my fingers, looking down the five *storeys*. — M. Atwood, *Cat's Eye*

では，program(me) という語はどうであろうか。

	programme	program	either
SCS	10	77	12
TM	8.5	59.6	31.9

この語の場合には，上の3語とは異なり，短いアメリカ風の綴りのほうが好まれるという傾向がある。新聞や雑誌でも通例 program のほうを使用している。

(4) The *program* would take years to complete, according to industry experts. — *The Province*, March 1, 1989

しかし，学術的な文章などでは，長いイギリス綴りが使われることがある。

(5) The 1976 report of Keith Spicer, Commissioner of Official Languages, suggested strongly that preponderant effort should be devoted to second language teaching in schools and universities rather than to crash *programmes* to make existing civil servants (and many people in the private sector) bilingual.

— K. McNaught, *The Penguin History of Canada*

catalog(ue) やdialog(ue) の綴りでは -gue 形が好まれる。

	catalogue	catalog	either	無回答
SCS	73	15	8	
TM	55.3	27.7	14.9	2.1

plough と plow については，下の表でみるように SCS と筆者の調査とでは異なる結果が現れている。Ireland の調査ではイギリス綴りが優勢であるが，筆者の統計では両者の間に有意差はない。

	plough	plow	either
SCS	48	39	12
TM	29.8	31.9	38.3

GCE では plough を優先見出しとしている。

draught と draft については，draft のほうがよく用いられる傾向がある。

	draught	draft	either
TM	8.5	38.3	63.2

しかし，ここで注意しなければならないのは「どちらでも（either）」と回答した25名のうち５名が「意味により使いわける」と答えている。これらの人々によれば，「生ビール」の場合は draught を，「すきま風」の意味では draft を用いる。

同様の使い分けが cheque と check の場合にも認められる。カナダでは一般に cheque が好まれる［*Editing Canadian English*, 84］といわれているが，次に示す同一新聞記事の用例からも分かるように，意味により二つの綴りを使い分けることが多い。

(5) And the first $21,000 compensation *cheques* could be mailed out before the end of the year, Miki said.

— *The Vancouver Sun*, November 1, 1988

(6) He said redress secreteriat staff will *check* government files to see whether an applicant has a criminal record. — *ibid.*

3．カナダ英語の綴り字の特徴

上に具体的に観察したように，一言でいえばカナダ英語の綴りはイギリス英語とアメリカ英語の用法の混ったものである。

この原因は，カナダという国の置かれた歴史的・地理的立場を考えてみれば容易に理解できよう。[6)]

綴り字の面だけに限定してみると，イギリスでは1755年に Samuel

Johnson の辞書が，アメリカでは1828年に Noah Webster の辞書が出版されたことにより一種の規範が設けられたが，カナダにおいては，そのような権威（authority）は一度も生まれなかった［Ireland, 1976 : 65］ことにも起因する。さらに，今日のカナダの編集・出版者は綴り字を決めるよりどころとして，カナダの辞書ではなくて *Webster's Ninth New Collegiate Dictionary*（1983）や *Concise Oxford Dictionary*（1982）を用いる傾向がある［*Editing Canadian English*, 13］という現実[7]からしても，英米両方の綴りが混在するのは当然ともいえよう。

「混在」と述べたが，規則性がない訳ではない。いわゆる改まった公式の（official）場面では，通例イギリス綴りが用いられ，日常的な場面ではアメリカ綴りが用いられる傾向があるという点が以前から指摘されている。そこで，2で扱った項目について，出版物を除外して，日常生活における個人レベルでの綴り字使用の実態のみを対象とした Scargill や Ireland の調査と筆者の調査結果を比較してみると，ほぼ同一の傾向が認められる。つまり，日常生活レベルでは，-our（例：colour），名詞の -ce（例：defence），語尾や派生語形成における二重子音字 -ll-（例：travelled, traveller），黙字 -e（例：judgement）などではイギリス風の綴りが好まれる。他方，名詞の語尾 -er（例：center），動詞の語尾 -ze（例：analyze），そして encyclopedia などにみられる単母音字 e の使用などの面ではアメリカ風の綴りを好む傾向が認められる。また個々の語でみると，grey，pyjamas，storey などはイギリス風，program や draft ではアメリカ風の綴りを用いるという規則性がある。

上の結果を見るとイギリス綴りのほうが多いように見えるが，ここで取り上げた項目の単純な数字上の比較だけで英米いずれの綴りが好まれているか（あるいは頻繁に使用されているか）を論じることは出来ない。調査の中で現れた「併用（either）」という回答数を考慮するなら，確かに日常生活の中ではアメリカ英語の綴りが多く見られるといっても差し支えない。このことは，2であげた出版物からの引用例文中の綴り字の傾向と比較すれば明ら

かである。

Pringle（1985：189）は，カナダの出版物は大衆的な（popular）ものほどアメリカ綴りが用いられ，学術的な（learned）出版物や一見したところ形式ばった（formal）内容のものほどイギリス綴りが用いられると述べている。筆者の集めた用例から判断すると，公文書や学術専門書・教科書などのいわゆる「堅い」文献や純文学ではイギリス綴りが多いが，より日常的な新聞や雑誌，通俗的な大衆向け小説などのレベルになると程度の差こそあれアメリカ綴りがかなり取り入れられている。しかも市場規模の関係でアメリカの出版物（新聞・雑誌を含む）が大量に出回わっており，無意識のうちにカナダ人の用いる綴り字に影響を与えている。

カナダで売られている多くの商品がアメリカからの輸入によるもので，これらの製品のラベルや説明書は当然アメリカ綴りである。また，テレビの広告（アメリカ商品，アメリカの放送）の影響も大きい。Ireland は中学生の間では，イギリス風の -our のほうが -or よりも好まれているにもかかわらず，唯一 odor（46%）というアメリカ綴りだけが odour（38%）よりもよく使用されている事実に注目して，おそらくこれはアメリカ（商品）のテレビ・コマーシャルの影響であろうと述べている。

カナダ英語の綴りの特徴については地域差があることも指摘されている。Ireland（1979）の調査では，オンタリオ州やブリティッシュ・コロンビア州では他の州に比べてイギリス風の綴りを使う傾向があり，この2州ほどではないがニューファンドランド州もイギリス風にならう傾向がある。反対に，アルバータ州ではアメリカ風の綴りを用いる傾向がある。このことは各州や地方の置かれた歴史的・地理的要因によるものである。

1890年の総督令（order in council）により公務員（civil servants）はイギリス風の綴り字を用いることが定められ，永年にわたってカナダの学校教育もこれに従ってきた。オンタリオ州とブリティッシュ・コロンビア州では，特にその傾向が強かった［Synopwich, 1986：47］といわれている。ブリティッシュ・コロンビアの場合はカナダ自治領に加わる以前から英国王室直轄植民

地であったことも影響しているであろう。筆者が本稿で取り上げた調査はバンクーバー，すなわちブリティッシュ・コロンビア州での語法調査に基づくものであるから他の地域に比べるとイギリス風の綴りの使用者が多いという結果が出ているかも知れない。

む す び

本稿で指摘を試みたのは以下の点である。

1．カナダ英語における綴り字は英米両方の用法が共存するが，そこにはある程度の規則性が認められる。

2．改まった，あるいは公式の場面ではイギリス用法が好まれるが，日常生活の中ではアメリカ用法もかなり用いられている。

本稿では検討しなかったが，年齢的な差はどうであろうか。日常生活における大国アメリカの影響が徐々に浸透し，将来若年層を中心にアメリカ綴りへの傾斜が強まっていくのであろうか。それとも，アメリカ英語の影響を受けた若者たちも成長し社会の中核となる頃には公式的な場で使われているイギリス用法に傾いていくのだろうか。この点については長期間にわたる調査が必要となるであろう。すでに四半世紀も前に Wanamaker（1966）は "The trend seems to be in favor（favour）of the shorter and simpler American forms, which are modifying the writing of Britishers as well as Canadians. . ." と指摘している。

1990年1月の米加自由貿易協定発効により両国間の結びつきが一層強まる中で，Canadian identity を大切にする文化人や学者の間では，アメリカ用法を排して，イギリス風の綴りを守ろうとする人々が珍しくない。[8] カナダ英語における綴り字の問題はカナダという国の将来の在り方と深く関連していると言っても決して過言ではなさそうである。

〔注〕

1）「カナダ英語小史」，『英米評論』，創刊号，57－74。

2）筆者は60名余りを対象に調査を行ったが，外国生まれの回答者は集計から除外したため，有効回答数は47となった。この47名のうち B. C. 州以外の出身者の内訳は，サスカチュワンおよびマニトバ州各１名，アルバータ，オンタリオ，ケベック州各２名，計８名である。

3）有効回答者47名の年齢構成は，10代７名，20代10名，30代16名，40代11名，50代１名，60代２名。

4）カナダ連邦政府の発行した公文書作成マニュアル *The Canadian Style*（1985：55）は，つぎのように述べている。

> The spelling authority recommended by this manual is the *Gage Canadian Dictionary* (1983), since it reflects the usage of the majority of federal government departments and agencies more closely than do the *Webster's* or *Oxford* dictionaries, is based on research into Canadian usage, and contains specifically Canadian terms.

ただし，下注７）を参照。

5）この語に関しては ＊skillfull などの誤った綴りを答えた者が24%もいた。

6）この点については拙稿（1990，上記注１）で述べたので，ここでは繰り返さない。

7）*GCD* は中型辞書で収録語彙数に限りがあるため，英米の辞書を参考にせざるをえないという事情がある。

8）カナダ文学界の中心人物のひとり Margaret Atwood の作品や代表的な総合雑誌 *Saturday Night* などでは，主としてイギリス風の綴り字が用いられている。

参考文献

Avis, W. S. *et al.* (1983) : *Gage Canadian Dictionary*. W. J. Gage Ltd.

Department of the Secretary of State of Canada (1985) : *The Canadian Style: A Guide to Writing and Editing*. Dundurn Press Ltd.

Freelance Editors' Association of Canada (1987) : *Editing Canadian English*. Douglas & McIntyre

Ireland, R. J. (1979) : "Canadian Spelling: How Much British? How Much American?" *The English Quarterly*. Vol 12. no. 4 (Winter 1979／80), 64－80

McConnell, R. E. (1979) : *Our Own Voice: Canadian English and how it is studied*. Gage Educational Publishing Ltd.

Pringle, I. (1985) : "Attitudes to Canadian English," in S. Greenbaum (ed.), *The English Language Today*. Pergamon Press, 183－205

Scargill, M. H. (1974) : *Modern Canadian English Usage: Linguistic Change & Reconstruction*. McClelland and Stewart Ltd.

Synopwich, P. (1966) : "Our Native Tongue," *Saturday Night*, March 1986, 42－51

Wanamaker, M. G. (1966) : "Your Dialect Is Showing," in Scargill, M. H. & P. G. Penner (eds.), *Looking at Language*. W. J. Gage Ltd.

(1990. 2. 23 受理)

Canadian Spelling

Toru Miyake

It is a well-known fact that Canadian spelling is a mixture of British and American usage. In this paper I try to clarify Canadian preferences, based on a survey conducted with 47 Canadian citizens in the Vancouver area. The results, which match those of Scargill (1974) and Ireland (1979), show a fairly predictable pattern of choice. It is also shown that American usage is widely accepted in informal daily life, while British usage is preferred on more formal or official occasions.